

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 20 日現在

機関番号：16301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24530826

研究課題名(和文) 教員養成のための協同的パブリック・トークの力量形成

研究課題名(英文) Development of Collaborative Public Talk Ability for Teacher Education

研究代表者

富田 英司 (Eiji, Tomida)

愛媛大学・教育学部・准教授

研究者番号：90404011

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究プロジェクトの目的は、教員養成課程の日本大学生を対象にした国際交流プログラムにおいて、参加者の協同的パブリック・トーク(言語的及び身体的に協同的な方法で、明示的な言葉を用いて会話に従事する行為)の力量を形成するための指導方法を開発することであった。この力量を形成するための場面として、参加者は海外の学校において、日本文化を紹介するための発表を英語でおこなった。参与観察による事例研究を重ねた結果、参加者が自らの発表経験を適切に振り返り、改善点を見つけ、その次の発表に反映させるというサイクルを成立させることが、発表を協同的にする上で最も重要であることが分かった。

研究成果の概要(英文)：The goal of the present research project is to develop an instructional method to foster the collaborative public talk, which is defined as talking with an explicit manner both in language use and gestures, of teacher candidates who learn in a university in Japan. In order to achieve this goal, an international student exchange program was chosen, in which participants deliver a presentation in English language to introduce Japanese culture to students audience in visited schools abroad. Repeatedly implemented case studies, using participatory observation method, revealed that establishing a reflective cycle is the most important process to render the presentation collaborative manner. In the cycle, the presenters should perceive their own performance properly, identify tasks to improve, and reflect their findings on their later performance.

研究分野：教育心理学

キーワード：国際交流 教師教育 コミュニケーション 評価 プレゼンテーション

1. 研究開始当初の背景

教員養成学部の学生は、親しい者との日常会話やフォーマルな場面で一方的伝達については、既にある程度スキルを持っていると考えられる。しかし、その2つの間にあるような場面ではその限りではない。例えば、知人や教員、学校関係者等との打合せや世間話、ゼミ等での議論等において、彼らは適切な談話ジャンルや非言語的行動を活用することが難しく、ぎこちない会話になり、意見交換や合意形成、問題解決をおこなうことが苦手であることが多い。

そこで本計画が独自に提案するのが協同的パブリック・トーク(以下 Collaborative Public Talk の略で CPT と記す)の概念である。CPT とは、それほど密な関係にない他者と効果的に交流するための技能であり、内容、言語運用能力、身体運用能力の3要素から構成される。内容については、その場に居合わせた聞き手と共有可能な題材を選ぶ必要がある。言語運用においては個人の意図や集団の目的を明確にし、話の展開を分かりやすく構造化する必要がある。身体運用においては、議論内容と対応して他者に開かれた姿勢や声、ジェスチャーを備えておく必要がある。この CPT は、対外的な交渉の機会をほとんど持たない学生にとっては、自然な文脈での力量形成が困難であるため、教育プログラムの提供が不可欠である。

申請者は、これまで科研費の支援を受けて議論教育研究に取り組んできた。これらは主に言語運用能力の面、すなわち談話過程の改善を目的としておこなってきた。これは社会構成主義的な国内外の諸研究が特に談話過程に注目しており、申請者自身が先行研究との関連性を維持しながら研究を進めようとしてきたためである。ところが、これまでの研究によって、議論の身体性が非常に重要であることが分かってきた。例えば、効果的に議論展開するグループは姿勢が成員に開かれており、視線も適度に交わされているという知見が集まりつつある。

また、これまでの研究は主に教室や大学の中に設けられた議論活動の場を対象に分析を進めてきた。しかし、現代の教師に求められるコミュニケーションのあり方を示すモデルが学生にとって得られにくく、彼らの目指すべき方向性が分かりにくいことが議論力の獲得へと動機づけることを妨げてきた可能性がある。その点を補うために本計画では、平成24年度から実施予定の海外教職体験プログラムを活用し、その参加の支援を通して、コミュニケーション力育成の方法とそのプロセスを明らかにすることとした。

以上をまとめると、本計画はこれまで教室で談話過程を中心に検討した議論研究を、(1) 学生からみて必然的に CPT が求められる活動を新たに構成するという点で拡張すると同時に、(2) 言語運用能力や議論内容といった談話過程だけではなく、身体運用能力の育成も

範疇に入れるよう拡張するものである。

2. 研究の目的

本計画は、より質の高い教員養成に貢献するために、CPT の力量を形成する手法の開発を目的としている。CPT の力量形成を促すための Problem-Based Learning (PBL) の1つとして海外教職体験プログラムを設定し、その指導法を形式的に構築する。そして、このプログラムの教育効果を、フィールドワークや質問紙等を通して検証すると同時に CPT の習得過程を明らかにし、他大学でも利用可能な知見として集約する。

3. 研究の方法

本プロジェクトは、海外教職体験プログラムを通して教員志望学生の CPT を育成し、その学習過程を解明すると同時に、学習環境を形式的に改善するデザイン研究として進められる。研究手法としては体系的な観察とフィールドノートを用いた。

具体的には、海外教職体験プログラムに参加する学生について、その準備段階と海外渡航中におこなわれるプレゼンテーションについてビデオ撮影や音声録画をおこない、CPT の力量形成過程を自然な文脈において観察する。記録されたデータは談話分析の手法を中心に用いて微視発生的な観点で分析を進める。

また、客観的に観察することに加えて、プログラムの実施を通じて明らかになった改善点については、積極的に改善を進めていく。特にプロジェクトの2～3年次は、それぞれ前年度で洗い出された課題を改善するための教育的介入を実施し、その効果を検証していく。

4. 研究成果

(1) CPT 獲得過程に関する知見

国際交流プログラムに参加した学生が渡航先で発表とその振り返りを数回反復しながら応答的なスピーチをする力量の変化を詳細に分析した。具体的には、発表の中で話し手が聴衆に参加を求めるクイズや質問などの問いかけ場面がプレゼンの実践を繰り返す中でどのように変化していくか検討した。学生が発表を通して意図した改善内容と発表後の省察内容が一致した学生については、回を重ねるごとに改善が見られた。このことから、学生の改善目標の設定に注意しつつ、それらに関連づけた省察を促進することで CPT の力量はより効果的に獲得されることが示唆された。

(2) CPT 指導法の開発

上記の CPT 獲得過程に関して得られた知見を元に、効果的な省察の指導法を開発した。これには学習者が自己評価に用いるルーブリックも含まれている。国際交流プログラムでの利用を前提とした、省察の指導を中心とした引率教員向けのマニュアルを現在編集中で

ある。

(3) プログラム評価ツールの開発

当初計画された課題に加えて、より広く国際交流プログラムの質や効果を測定・評価するためのツールの開発も進めた。玉川大学、鳴門教育大学、学習院高等科等の教員との共同研究によって短期国際交流プログラムの質を評価するループリックを開発し、その成果を論文として出版した。これに関連して、国際交流プログラムの質や効果を測定・評価するツールを集約するためのウェブサイトを立て上げた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

富田英司・近森憲助・中山晃・大谷千恵・山本昭夫・小野由美子 (2015). 国際交流プログラムを評価するループリックの開発 大学教育実践ジャーナル, 査読有, Vol. 13, pp. 9-15.

富田英司・白松賢・池野修・隅田学・向平和・鴛原進 (2014). ルイジアナ大学モンロー校と愛媛大学の相互国際交流を通じた教員養成の実践 大学教育実践ジャーナル, 査読有, Vol. 12, pp. 41-46.

Sivakumaran, T., Tomida, E., Hall, H. K., and Sumida, M. (2013). Exploring Factors Determining Motivation to Participate in Study Abroad Programs for Teacher Education Students in the U.S.A. and Japan. International Journal of Business and Social Science, 査読有, Vol. 4, No. 6, pp. 1-8.

富田英司 (2013). 日常的問題解決における会話を通じた知識再構成過程 愛媛大学教育学部紀要, 査読無, Vol. 60, pp. 47-57.

〔学会発表〕(計8件)

Akira Nakayama, Eiji Tomida, Kensuke Chikamori, Yumiko Ono, Akio Yamamoto, and Chie Ohtani (2015). How Japanese university students deal with cultural disequilibrium: A special focus on the process of constructing their beliefs about cross-cultural experience during their short-term study English abroad program in the U.S. The 27th Japan-U.S. Teacher Education Consortium, September 15, Pensacola (U.S.A.)

Eiji Tomida (2015). How undergraduates develop through helping international students. International Council on Education for Teaching (ICET) 59th World Assembly, June 19-22, 鳴門教育大学 (徳島県鳴門市)

Eiji Tomida, Kensuke Chikamori, Akira Nakayama, Yumiko Ono, Chie Ohtani, and

Akio Yamamoto (2014). Developing evaluation framework for short-term international exchange. The 26th Japan-U.S. Teacher Education Consortium, September 19, 東京学芸大学 (東京都小金井市)

Eiji Tomida, Naomichi Yoshimura, Masato Tanaka and Hisao Yamamoto (2013). How teaching career intention develops through practice teaching? European Association for Research on Learning and Instruction (EARLI) Biennial Conference 2013, August 28, Munich (Germany)

Eiji Tomida, Satoshi Shiramatsu, Kioh Kim, Heiwa Muko, Osamu Ikeno, Susumu Oshihara, and Manabu Sumida (2013). How American student teachers were supported in non-English speaking environment in Japan. The 25th Japan-U.S. Teacher Education Consortium, May 31, Tacoma (U.S.A.)

Eiji Tomida, Manabu Fukada, Osamu Ikeno & Shozo Fukada. (2012). The daily survey for process-oriented evaluation of overseas student teaching. European Association for Research on Learning and Instruction (EARLI) SIG 4 Higher Education Conference, August 14-17, Tallinn (Estonia)

Eri Imai, Eiji Tomida, Satomi Tamai, Keiko Katsumi (2012). A case study of an in-service Japanese teacher who learns in an American university. The 24th Japan-U.S. Teacher Education Consortium, July 8, 鳴門教育大学 (徳島県鳴門市)

Eiji Tomida, Thilla Sivakumaran, and Manabu Sumida (2012). What determines willingness to study abroad in teacher training program? The 24th Japan-U.S. Teacher Education Consortium, July 7, 鳴門教育大学 (徳島県鳴門市)

〔図書〕(計1件)

富田英司・田島充士 (編著) (2014). 大学教育：越境の説明をはぐくむ心理学 ナカニシヤ出版, pp.231-244

〔産業財産権〕

出願状況 (計0件)

取得状況 (計0件)

〔その他〕

ホームページ

<https://sites.google.com/site/assessmenttoolarchive/>

6 . 研究組織

研究代表者

富田 英司 (TOMIDA EIJI)
愛媛大学・教育学部・准教授
研究者番号：90404011